

炊き出し10年 心温め500回

「リーマン」契機 困窮者支える

NPO法人やまなしライフサポートが毎週1回、甲府市内で行っている炊き出しが27日、500回の節目を迎える。リーマン・ショックが起きた2008年にスタート。10年間にわたって、失業者や路上生活者らに温かい食事と居場所を提供し、社会復帰を後押ししてきた。この10年で雇用環境は改善したものの、近年は年金暮らしの高齢者や、うつ病など精神障害を発生した会社員の姿が目につくようになった。NPO法人理事長を務める中山八十司さんは「多くの人の支えがあって活動を続けられた。今後も苦しむ人たちに寄り添っていきたい」と話している。(山本就司)



炊き出しをするボランティア

甲府市内

県内NPO 今後とも寄り添う

「最近、あの人がアルバイトを始めたみたい」。20日、甲府市中央2丁目の甲府カトリック教会の講堂。訪れた24人はボランティアが作ったマナーボナス丼や煮物を口に運びながら、会話を弾ませていた。

炊き出しが始まったのはリーマン・ショックが起きた08年。非正規労働者の雇い止めが相次ぎ、東京・日比谷公園の「年越し派遣村」は失業者であふれた。県内もJR甲府駅周辺などで路上生活者の姿が目につくようになり、状況を見かねた甲府カトリック教会神父の発案で始まった。10年からは定例化し、毎週木曜日に開催。11年には運営組織を法人化した。

中山さんは友人に誘われ、09年からボランティアとして参加。「60人ぐらいが列をつくっていたが、下を向いて黙々と食べるだけ。会話なんてなかった」と振り返る。突然、

会社から契約を打ち切られ、人間不信に陥っていた人たちの心を解きほぐすのは容易ではなく、「話し掛けても反応は冷たかった」。

「失業者や路上生活者は社会との糸が切れてしまっている。その糸を少しずつ伸ばしていくことが社会復帰につながる」。諦めず語り掛けると、言葉が返ってくるようになった。「あの公園に足を悪くして、来られない人がいるよ」などの情報も教えてくれるようになった。

炊き出しを始めた当時、支援するのは失業者や路上生活者が中心だったが、この10年間で状況は大きく変化している。08年12月に過去最低の0.64倍だった県内の有効求人倍率は、今年7月には1.46倍に改善。一時は数十人いた県内の路上生活者も今年1月時点で3人となっている。

一方で増えているのが、うつ病などを発症し、会社勤めがままならない20〜40代の人たち。生活保護や年金を受給する高齢者も相次いでいる。中山さんは「炊き出しに訪れる人が世相を反映しているような気がしてならない」とつぶやく。

炊き出しで提供する食事の材料は無償で提供を受けている。今では理解が広まり、100を超える個人や団体からコメや野菜、卵が寄ってきて

いる。ボランティアの栄養士がメニューを考え、山梨英和中高の生徒や同校PTA、教会の関係者が食事を作る。中山さんは「多くの人の理解があつてここまで活動できた。感謝し切れない」と話す。

500回目を迎える27日はボランティアや食材を寄付してくれた人たちを招待し、記念品を贈る。中山さんは「理由はそれぞれでも多くの人が今も助けを求めている。これからも力を合わせて活動していきたい」と話した。